



メリークリスマス〜！の雰囲気もたけなわ。もしかすると、早めのホリデー旅行を満喫中に、旅先の中西部のどこかの街で初めて“ジャングル”を手にした、なんて方もいるのでは？？ さて、旅の醍醐味や楽しみ方ってというのは、まさに人それぞれで色々ありますよね。“食”というものもその代表格ではないでしょうか？

第38回目の今回は、近鉄インターナショナル・シカゴ支店の畑尻 郷（はたじり・あきら）さんの登場です。“旅食”のスペシャリスト（？）ならではの“旅と食”をテーマにした面白いお話が聞けそうですよ！



アリゾナの「フウド」

文・写真：畑尻 郷
協力：近鉄インターナショナル・シカゴ支店

私は、旅先でとにかく食べるのを楽しみにしている。食は文化なりとはよく言ったもので、その土地でその地のものを食すことは、土地柄や慣習を理解する意味で大変意義がある。まさに Food は風土である。アメリカは食文化が乏しいとか、味覚の砂漠なんて言われ方もしているが、多くの移民を受け入れている多文化国家、人種の坩堝（るつぼ）・メルティングポット、なんて言われているだけあって、実はその種類は多種多様である。お互いに影響しあい、新しいものを持ち寄って、さらに新しいものが作られる。そんな中、アメリカで生まれた民族料理（中華料理の Chop-suey やカリフォルニアロール等）もある。そんな食文化を探るだけでも結構いろんな旅が出来るものである。



アリゾナを旅した時のことだった。フェニックスで車を借りて、3時間くらい走ったところにセドナという場

所がある。「癒しの地」という異名で有名な観光地だ。ここで街の中心部にあるレストランに入った。もともとアリゾナ周辺は South Western Style が地元の味として有名だが、どうしてもメキシコ料理と重なっているので、とうもろこしの粉や豆を煮たような料理が多い。そのため、アリゾナらしさを強調するといっても中々難しい。地元の人に聞けば、「チリペッパーはアリゾナの象徴だよ。」と言うが、辛いソースは後付で“かけたり”、“かかったり”が多いので、いまいちインパクトが弱い。なんかそれらしいものはないかなとメニューを覗き込んだ。すると前菜の欄に「サボテ

ンのステーキ」と書いてある。サボテンはアリゾナのライセンスプレートにも描かれているくらい象徴的なものである。「これだ！」と思い、早速ウェイトレスを呼び、サボテンのステーキをオーダーしようとしたら、「まずいから食べない方がよいよ。」と言われる。その店の代表的なメニューと紹介してあるにもかかわらず、「まずい」というのは「うまい」と薦めるより難しいことだ。その真剣な面持ちに連れ合いにも「やめれば…」と言われるが、食への好奇心が誰よりも強いと自負している私は、「まずくても全て食う！」と言って強引に注文した。

ちなみにアリゾナでレストランに入ってオーダーをする飲み物はなんといってもマルガリータだ。アリゾナのマルガリータはその種類の多さに驚く。ストロベリーは当たり前で、ピーチ、パイナップル、アプリコット、グレープ、ウォーターメロンなど等、とにかく多彩である。私が注文したのは、無難で美味しいピーチマルガリータだった。



さてついにその「まずい」サボテンステーキが出てきた。周りのお客も私とウェイトレスのやりとりを聞いていたので、興味深そうに覗き込んでくる。緑鮮やかなサボテンがピンクのお皿に、オレンジ色のソースがかかって出てきた。香りは特になく、これといったスパイスも利かせている訳ではない。サボテンそのものを喰えと言っているような感じである。ナイフとフォークでサボテンを一口食べてみる。「・・・」、素朴な味である。しかし確かに美味しいものではない。連れ合いにも一切れ試させてみる。彼女

は「にがごり（にがうり）をそのまま食べているみたい。」と言った。確かにこのサボテンは「苦味」が個性になっているのでその表現は正しいが、にがうりとはまたちょっと違う感じがする。ウェイトレスがすかさずやって来て、「まずいでしょ??」と一言、周りのお客がクスクス笑っているのに気が付く。まあ、まずいでしょと言われて「まずい」と答えるのもしゃくなので、「まあ、素朴な味だね (It tastes simple.)」と答えておいた。

サボテン料理はアリゾナで一般的かと言われるれば、決してそうではないのだろう。むしろよっぽどの変わり者の観光客の為に用意されているといった位置付けの料理かもしれない。しかしそんな料理であってもしっかりと、その土地の個性を主張しているところがある。このときはアリゾナを約1週間に渡って旅をしたのだが、アリゾナはその素朴さに本命が隠されている。確かにグランドキャニオンやモニュメントバレーのような“ごちそうの観光地”もあるが、真のアリゾナはなんにも無い大地から響く風のような「ささやき」に耳を傾けるのが楽しい。そこには人々の生活や生き様、またある場所では執念や怨念といったものまで感じられた。一見なんにも無い砂漠の大地に、少し苦味の効いた哀愁の様なものや人間としての懐かしさを感じるところにアリゾナの醍醐味がある。サボテンステーキが教えてくれたアリゾナの素朴さは、いかにも「フウド」であったように思えてやまない。

